

分科会報告

里山に託す私たちの未来「里山と子ども」



雑木林で遊ぶ・学ぶ・子どもたち

写真 小幡和男（中村俊彦著「里やま自然誌」より）

1 里山と水田・稲作分科会

～田んぼが育む生きものと子供たち～

①茂原農業高校 農業土木部による報告



②田尻高校 岩淵氏による基調講演



まとめ

1. 高校生のようないき力
2. 農村社会の人間関係の再構築
3. 農業をしながら自然を見る精神的なゆとり
4. 地域にあった人と自然が共生できる農法の確立

必要です

水田稲作分科会では4月23日茂原市の茂原農業高校文化ホールで分科会を開催しました。分科会では、生き物の視点から田んぼを見直し、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換してくための方向性を、次世代を担う高校生を交えて検討いたしました。シンポジウムでは初めに、茂原農業高校農業土木部が部活動で実践している、一宮町で30年間放棄された谷津田再生の取り組み状況を報告、荒れた谷津田を再生させた時の達成感、生き物が戻ってきたときの驚きと喜び、その方向性がこれから千葉県での農業を楽しくやりがいを感じられる農業のあり方であることを、高校生から改めて思い知らされました。

つづいて、宮城県立田尻高等学校教諭の岩淵成紀さんからは、「ふゆみずたんぼの生きもの曼荼羅」と題し、基調講演をしました。岩淵さんは生き物を活用した農法を例に挙げ、自然を大切にすることを農業に感じられるようにすることが大切だと思う、と語りました。

ミニコンサートでは村おこしシンガー田中卓二さん、音楽とトークにより田んぼと自然再生について楽しみながら理解を深めました。

パネルディスカッションでは、田んぼの仕事でも、今効率化のために、一人一人が孤立化してしまい、人間関係が崩れてしまった、人間関係の再構築が必要だということや、農業は重労働のイメージだが、毎日違った自然に出会える楽しみがあるという話がありました。以上まとめとしまして、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換していくためには、高校生のようないき力、農村社会の人間関係の再構築、農業をしながら自然をみる精神的なゆとり、その地域にあった人と自然が共生できる農業の方法や技術の確立、以上4つが必要であるとわかりました。以上で報告を終わりにします。

(渡邊英二)

2 里山と生物・ビオトープ分科会

～谷津田・里山における生物多様性の体験～

場 所：千葉市緑区大和田

実 施 日：2005年5月1日(日)

10:00～12:30: 観察会と生きもの調査実践

14:00～15:30: こどもたちの企画による谷津田・里山遊び

参 加 者：70名(2～75歳)

●趣旨

人が適度に手を加えることによって、生物多様性が維持されている「里山の自然」

<昨年> データをあげて学術的に評価

<今年>

・観察会・生きもの調査 → **生物多様性体験**

・こどもの企画で里山遊び

里山＝安全で楽しい遊び場

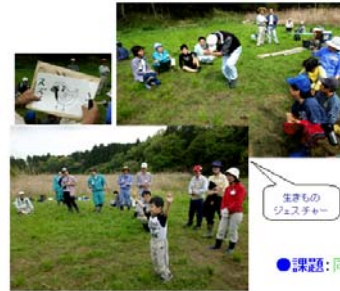


観察会と生き物調査



午後は、こどもたちが企画した谷津田・里山遊び

谷津田・里山は、
生きものだけでなく、
こどもたちも育んでいた



こどもスタッフ



人も生物多様性の要素

●課題：同様の活動を他地域で実践していくには・・・

生物・ビオトープ分科会では、谷津田と里山における生物多様性の体験ということで、5月1日に千葉市緑区下大和田というところでイベントを行いました。この場所は千葉市が調査した63箇所の谷津田のうち、最も自然度の高い、生き物が豊富だと評価されている場所です。生物・ビオトープ分科会は、「人が適度に手を加えることによって、生物多様性が維持されている『里山の自然』」というメインテーマを掲げております。昨年は里山のデータを挙げて学術的に評価しました。今年は観察会や生き物調査をすることによってそれを体験してもらおう、それから子どもの企画で里山遊びということで、里山は安全で楽しい遊び場だということを検証してみたいということでイベントを行いました。これが観察会なんです、午後は、子ども達が企画した谷津田里山遊びということで、子ども達が全部企画しました。中学1年生の翔くん、小学4年生の千春ちゃんと瑞紀くん、年長のげんちゃん、この子たちが3つくらいイベントを考えまして、谷津田里山における生き物のレクチャーということでこれを大人子どもでたてました。気が付いてみたら、谷津田里山は生き物だけではなくてこのような子ども達も育んでいたということです。この子達がここに関わったのは4～5年前からで、げんちゃんなんかオムツをはきながらイベントをやっていました。課題としては、同様の活動を他の地域でどのように実践していったらよいか、非常に大変だなあと感じました。以上です。

(田中正彦)

3 里山と教育・学習分科会

「里やまは人づくりの場」

- 野外体験1
「里やま前線・野草調査と講演」
千葉市立みつわ台北小学校 4月29日(日) 参加105名
・講師:小平哲夫(千葉県森林研究センター次長)
亀井尊(千葉県立中央博物館副館長)
- 野外体験2
「生態園での自然教育実践」
千葉県立中央博物館生態園 5月7日(土) 参加25名
・講師:中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)
林浩二(千葉県立中央博物館生態学研究所)
亀井尊(千葉県立中央博物館副館長)
寺嶋龍吾(森林文化教育研究会幹事)
- シンポジウム
「自然体験はオマケじゃない」
千葉県立中央博物館講堂 5月7日(土) 参加132名
・里山と環境教育の意義:大槻幸一郎(千葉県前副知事)
・自然体験はオマケでない理由:
中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)
・里山は人づくりの場:高井進夫(東京大学名誉教授)
・パネリスト: 亀井尊(千葉県立中央博物館副館長)
林浩二(千葉県立中央博物館生態学研究所)
寺嶋龍吾(千葉県立中央博物館副館長)
高井進夫(東京大学名誉教授)
・総合司会: 鈴木敦(IPQみどりのネットワーク千葉)
- ・オカリナとギター演奏: 山口利夫ほか
・わらべうた: なぎさ保育園、たいよう保育園の園児のみなさん



「自然体験はおまけじゃない」シンポジウム



なぎさ保育園、たいよう保育園の園児による「わらべうた」でシンポの会場が和む

3 まとめ: 里やま問題解決のキーワードは教育にあり!

- 現状
 - ・物が豊かな社会になった半面、人の心の問題が深刻化
 - ・子どものキレル・引きこもり、少年犯罪が増加
 - ・子どもの遊びが「家」の中でテレビ・パソコンが増加し、「里やま・自然体験」が減少
- 結論
 - ・基層文化の根を腐らせてはならない。里やまの豊かさは都市の高層につながる
 - ・里やまでの自然体験は人としての大層をつくる
 - ・自然体験は子どもたちの感性を磨き、教育(生きる力)の原点オマケではない
 - ・子どもの遊び・自然体験の「時間・空間・仲間」の三間の確保は大人の責任
- 課題
 - ・学校教育における総合学習の重要性の再認識
 - ・社会教育が子どもの自然体験をいかに支援するか
 - ・社会の在り様を子どもの視点で考える



教育・学習分科会は、我が国生活文化の伝承。幼少期に里山の自然に触れ、「情緒・感性」を育てる観点で「里山と子ども」という命題を実践しています。

4月29日《緑の日》千葉市若葉区みつわ台北小学校をベースに近隣の東寺山、原町、源町など里山を訪ねました。この日、原町の谷津田では田の神、水の神に豊作を祈願する神事があり、集落の方々と交歓する一幕もありました。観察後は採取した野草を家庭科教室で調理。参加した105名が自然の恵みに感謝しました。

5月7日(日)千葉県立中央博物館(132名参加)。午前は生態園で草木遊びなど子ども向けの遊びを修得。午後は講堂でシンポジウム「自然体験はオマケじゃない」をテーマに4人の発表者がパネル討議を行いました。冒頭大槻副知事が挨拶し、千葉県里山条例誕生の逸話を紹介。中村副館長が、大脳と自然体験の密接な関わりを講演。筒井東大名誉教授が「里山は人づくりの場」と題して基調講演を行いました。

〔まとめ〕[現状]物が豊かになった半面、心の問題が深刻化。キレル子ども、引きこもりの増加。子どもの遊びは、ファミコンなど屋内が増加し自然体験などの屋外が減少。

〔結論〕里山の自然の豊かさが人の心を育てる。子どもの遊び「自然体験の、時間空間、仲間」など三間の確保は大人の責任。農林業など基層文化の根を腐らせてはならない。里山の疲弊は都市の凋落へ。自然体験は教育のオマケではない。

〔課題〕学校教育で「総合的な学習の時間」の重要性を認識し正しい指導力を発揮して欲しい。社会教育が子どもの自然体験を如何に支援するか。社会の有り様を子どもの視点で考える。(上善峰男)

4 里山と森林・林業分科会

市民の暮らしと森林の未来 ~森をつくる地域循環型の暮らし~

共催: 東金市

- 自然体験:
日時: 2005年4月30日(土)9:30~ 参加者 49名
受付開始: 東金文化会館エントランスホール
10:00~12:00 森林ウォッチング
湯の森の森へあしたの森



- シンポジウム:
日時: 2005年4月30日(土)
会場: 東金文化会館3階会議室 参加者 53名

昼食・交流

- パネラー:
吉岡 寛: 山武郡市森林組合 組合長
東金市建設部都市整備課 東金市経済環境部農政課
東金市経済環境部環境保全課
本間 一夫: さんむフォレスト
コーディネーター: 梅田 忠弘: さんむフォレスト



- その他/パネル展示
東金市建設部都市整備課 東金市経済環境部環境保全課
東金市経済環境部農政課 ちほ環境情報センター
さんむフォレスト
プレゼント 東金市建設部都市整備課から花の種をプレゼント

4 まとめ: 地域循環型の暮らしが森をつくり、地域をつくる!

- 現状
 - ・戦後の無理な拡大造林の後、森林の手入れが出来ていない。
 - ・東金市は市民による森づくりなど、市民の自然体験を支援している。
 - ・山武杉を活用した住まいづくりなど、地域循環による森林再生運動の実施。
- 結論
 - ・森林の木材生産以外の多面的機能を守るために人の手が入る必要がある。
 - ・地域循環型の暮らし方が、地域の森や自然を守る力になることを再確認する。
- 課題
 - ・木質バイオマスエネルギーの利用など、森林が暮らしと結びつく仕組みづくりが必要である。
 - ・林業が産業として成立する形での市民参加と行政の協力を考える必要がある。



森林・林業分科会は、山武杉の産地・東金市を会場として、東金市役所との共催で分科会を開きました。午前には東金市民がつくる森林公園をウォッチングし、午後はパネルディスカッションを行いました。森林が美しかった過去について知り、現在の状況を理解して、森林の未来を考えようというのがパネルディスカッションのねらいです。

生活資源の多くを森林に依存していた時代は、地域の暮らしと森林が美しく調和していた、という過去の話が基調になりました。現在、地球温暖化が大きな問題となっているなかで、木材が理想のエネルギー源といわれながら、木材業界の中では端材や残材の処分に困っていること、利用しようとするれば現代の暮らしの中で、利用できるテクノロジーが身近にあること、などを明らかにし、市民が木材の産地、エネルギー源としての木質バイオマスの産地に、暮らししている恩恵にあらためて気づくことが、森林再生に関心を持つ第一歩になるものと考えました。東金市の、田んぼの学校の取り組みからは、林業への多くの示唆を得ました。田んぼの学校は、農民が遊休農地を利用して、有償で一般市民に農業指導をする農業の一形態ですが、農民の発想の背景に、農業という職業の公益性の自覚と、農業者としての誇りがあります。森林所有者に森林の公益性と林業の重要性がしっかり自覚されてこそ、市民参加の森づくりのあり方が、明確になってくるものと思います。昨年の第1回里山シンポジウムでは、市民、森林所有者、行政のそれぞれの役割に応じた、相互協力システムの構築が必要である、と提言しましたが、今回はそれを受けた一つの成果として、継続的な議論の場をつくるのが出来たものと思います。

(稗田忠弘)

5 里山と竹分科会

里山と竹害について

●シンポジウム:
日時 4月30日(土) 10:00~12:00まで
場所 東金文化会館2階 第二会議室
参加者 22名

竹害について説明
竹についての相談、質問の実施

メンバー

田代武男(竹研究会会長)
田中昭三(竹研究会理事)
林 正治(竹研究会理事)



5 まとめ 里山問題解決には竹の枯殺、竹林の整備が急務

- **現状**
 - 1 里山の美しい竹林は、日本の原風景である。「竹馬の友」といわれるように、これまで子供と竹とは切っても切れない関係にあった。ところがこの40年間に里山をとりまく環境は大きく変化している。
 - 2 里山の荒廃の一因は、放置された竹林にある。放竹林は里山の生態系に悪影響を与え、防火の面からその危険性が指摘されている。
- **結論**
 - 1 子供たちの健全な育成には、美しい里山、美しい竹林が欠かせない。
 - 2 里山を守るためには、竹の枯殺、竹林の整備が急務である。
- **課題**
 - 1 竹は地下茎で繁殖する間、特性があり、常識的な対応では歯が立たない。竹に対する知識の普及が必要
 - 2 放竹林は生物多様性を低下させ、土砂災害を頻発させる。危険性への認識が求められる
 - 3 拡大する竹林を阻止するには、個人では無理である。行政あるいは研究機関に働きかけ、その対応が急務である



竹分科会では里山と竹害を取り上げました。4月30日東金文化会館で行いました。シンポジウムでは、放竹林あるいは竹害についての説明、竹について困っている方であれば相談に乗り、竹についてのいろんな質問を出し、それに答える形で行いました。里山は本来美しい竹林で覆われていました。美しい竹林は日本の原風景です。竹馬の友と言われるように、これまで子どもと竹とは切っても切れない関係になりました。ところが、この40年間に里山をとりまく環境は大きく変化しております。里山の荒廃の一つの原因は放置された竹林にあります。放竹林は里山の生態系に悪い影響を与え、災害のもとになっていて、災害の危険性が最近指摘されています。写真をご覧ください。放竹によって裏山が崩れを起こしている様子です。真竹や孟宗竹では地下茎が30センチまで伸びるのですが、放竹林では地下茎が弱り、一般的に考えられているよりも頻繁に崩れが起きている。その30%から40%が放竹林が原因ではないかと調査し、対策を考えていかなければならないと思っています。子どもたちの健全育成には美しい里山と美しい竹林が欠かせません。そのためには放竹林の枯殺策などの竹林の整備が急務です。課題としては、竹は地下茎で繁殖する特性があり、常識的な対応では歯が立たない。竹についての基礎的な知識の普及が必要です。放竹林は生物の多様性を低下させ、土砂災害を起こさせているという危険性を多くの方に認識してほしいと思っています。拡大する竹林を阻止するには個人では難しいと思われるので、行政等による対応が望まれます。

(田代武男)

6 里山と食分科会

車座食談義 みんなで語ろう！ 千葉の食

●自然体験:
日時 2005年5月14日(土)
会場 鴨川市 大山千枚田保存会棚田倶楽部
参加者 36名



1 太巻き寿司づくり

指導 千葉県伝統土料理研究会
龍崎 英子さん、荻野 喜子さん、杉崎 幸子さん、伊藤 美美子さん、山形 礼子さん

2 車座食談義「みんなで語ろう！ 千葉の食」

パネラー 石田 三示さん(大山千枚田保存会理事長)
池田 忠美さん(南総ふるさと発見伝まほろば編集長)
菅沼 弘夫さん(子どもに学ぶ会代表)
平本 紀久雄さん(千葉の海と漁業を考える会代表)
美濃輪 やいれさん(元千葉県生活改良普及員)
山口 孝さん(地方公務員)
龍崎 英子さん(千葉県伝統土料理研究会会長)

コーディネーター 遠藤 陽子(千葉自然学理事)



6.まとめ: 今、郷土料理や食について考えていること

- **現状**
 - ※先人の知恵を掘り起こし、伝える活動をやっている。食文化フォーラムを立ち上げた。
 - ※伝承活動を進めたいと、子どもを対象に食文化啓蒙事業に取り組んでいる。
 - ※子ども達の母の弁当が原点。子どもたちにいまの食をどう伝えるかが課題。
 - ※自分達が経営しているには足りないもの、暮らしに自信を持ち、これを外の人たちに伝えて行きたい。
 - ※一律の栄養重視の食では、味覚が育たない。
 - ※千葉の海岸は全国ワースト3、九十九里海岸の砂が失われている。
- **課題と結論** 今後取り組むべきこと
 - ※千葉の郷土料理は多いが、食に対する情熱が足りない。
 - ※地元では「おきき」の得意なおばあちゃん、まだまだ名産品がある。
 - ※地域の漁師は、ゴンズイ・ハコブナなどのおいしい食べ方を知っている。
 - ※地域のおいしいものを集め、弁当コンテストなどを行って、これをコミュニティービジネスとして展開させたい。
 - ※棚田の米がなぜおいしいか？棚田は地すべりの復興の産物。
 - ※おいしいものをどう普及するか、それには価値観や経済行為の転換が必要。観光業者は一律の料理で対応がない。だからフォーラムを立ち上げた。



食分科会では5月14日に大山千枚田棚田倶楽部で開催しました。

その昔、私は、農家の女性から昭和30年ごろまでは「谷津田は米びつ」だったと言う話を聞いて深い印象を受けたのを覚えています。日照が続いても大風が吹いても周りの里山に守られた谷津田というのは、大きな被害を受けることなく安定的に米がとれた田んぼだったのです。

このように、自然と深くかわりながら、豊かな実りと家族の安泰を祈る暮らしの中で年中行事が生まれ、郷土料理が伝えられて来ました。これを次代に伝えていくにどうしたらいいかということでも話しあいました。

まず午前中は郷土料理の体験ということで、みんなで太巻き寿司づくりをしました。太巻き名人の龍崎先生に教えてみんなでつくって、それをお昼にしました。

午後は「車座食談義」里山、海とかかわる暮らしの中で生まれ伝え続けてきた郷土料理について語り、次代に伝えて行くために今必要なことについて語り合いました。

先人の知恵を掘り起こし、伝えるため食文化フォーラムを立ち上げて活動している事例や子どもを対象に食文化啓蒙事業に取り組んでいる事例が紹介され、今後も郷土料理を伝えて行きたいというのが皆さんの意見でした。

今、農業改良普及員たちが調査したものを残す努力が必要。昔は集まりがあると「揚げ重」を皆で持ち寄ったものだ。もう一度そういうものを取り戻す意味で、食の文化祭などをやったらどうか、或いは地域のおいしいものを集めて「南総里見八犬伝弁当」を作っている。コンテストなどを作って地域のおいしいものを集めコミュニティービジネスにすすめていきたい。子どもに対してはやはり、身体を動かし、おながすいた経験をさせ、「うまい！」という感動を体験させたいなどが話し合われました。(遠藤陽子)

7 里山と芸術分科会

谷津田における人と自然とアートの出会い

日時:5月15日(日) 10:00~15:00

場所:大やぶ池谷津田(千葉県緑区越智町)

参加者数:約80名

『ワークショップ～やつだのやはさうのや!～』

●ドームをつくらう!
竹を使ったドーム作りと間伐材を利用した大きなテーブル作りを行いました。
*講師:横田耕明(グループ2000)

●野草で天ぷら!
大やぶ池のまわりを散策して野草をとり、天ぷらにしてみました。またチャリカフェという移動式カフェも出現し、参加者に飲み物を振る舞いました。
*講師:細川隆・福田洋

●楽器をつくらう!
竹を使って楽器を作り、みんなで演奏しました。
*講師:小林正幸(ウッディ工房)



まとめ:この谷津田がたくさんの人にとって、来て、楽しんでらおう!

●現状
*千葉県内に住んでいる方たちにも「大やぶ池谷津田」のことがあまり知られていない。
*この谷津田に残土・産業を推進しようとする動きがある。

●結論
*この地域のことを、もっとたくさんの人たちにとって必要がある。
*この谷津田は自然豊かな素晴らしい場所。何かこの場所性を活かしたことをしたい。
*子どもだけでなく、大人たちも取り込むような企画作りが大切になる。
*一週間のイベントではなく、地域に根付くような活動をやっていくことで、この場所の継続的な活用が図られる。

●課題
*この谷津田を多くの人にとってもらうために、どのような表現が考えられるか



野草の天ぷら

里山と芸術分科会では5月15日に千葉県緑区土気大藪池谷津田を舞台にして創作ワークショップ「やつだのやはさうのや」というタイトルで野外体験の企画を行いました。当日は小雨のばらつくあいにくの空模様だったにもかかわらず、途中参加の方やスタッフを含めると約100名の人たちが集まってくれました。小学生以下の子ども達が多く、開会式前から元気いっぱいにはしゃいでいました。午前中は班を二つに分け、机、椅子制作、竹を使った道具作りを行いました。机づくりでは丸太切り、釘打ち、道具づくりでは竹を重ねて縛り、組み立てるといふ力仕事が多かったので、中心となったのは親御さんやスタッフの方たちでしたが、子ども達もおサポート役としてがんばってくれました。お昼は野草のてんぷらです。野草は周辺からとりあえず摘んできたもので、ほんとにすごうところに生えていたものばかり、これが以外に臭みがなく、くせがなくあっさり食べられました。またこの時、私達の企画であるチャリカフェという自転車にお茶などを積み込んで、いろんな所でカフェを開くという装置ですが、これで参加者のみなさんに飲み物を振舞い、好評を得ていました。午後は竹を用いての楽器づくりです。これには親も子ども参加者全員が熱中していました。ぱっと見は簡単そうなのですが、なかなか鳴らない、だからこそ楽しく夢中になれるという具合で、みなさんどんどのめり込んでいました。そのせいか出来上がったものはかなりのお気に入りになったようで、常に手の中にもち、ことあるごとにピーと吹いたりしている人もいました。一度吹くと分かるようです。ワークショップ終了後、また参加したいという声を多く頂いた一方で、このような話があったことは知らなかったという方も多くいらっしゃいました。

(宮村賢治)

8 里山と医療・福祉分科会

谷津田における福祉の有り方と新たな相互理解や交流の試み

●野外体験:

日時:5月15日(日)(雨天の場合は5月29日(日))
場所:千葉県緑区土気大藪池谷津田

子どもと何らかの障害のある方々を中心に工作作業を行う。参加者が個々の特徴を認め合い、助け合いながら楽しく活動することにより、地域福祉の在り方を模索する。

竹を使ったドームづくりと間伐材を使った机づくり
建築家・グループ2000代表の横田耕明

野草をとり、てんぷらをする+昼食
参加者は谷津田を散策して野草を採り、随時てんぷらにして食べる

チャリカフェで飲み物を振る舞う
(チャリカフェという移動式カフェ)

竹を使った楽器づくりとそれを使った演奏
ウッディ工房 小林正幸
里山の仲間たち 林



8 まとめ ワークショップ・五月の谷津田における福祉活動

●現状
*大藪池周辺は医療福祉施設が多い旧農村地域。
*現在の美しい環境はNPOや地元住民の活動で維持されている。

●結論
*小雨に100人前後が集合、自然・福祉への関心の高さを確認。
*五月の谷津田を存分に体験、予想を越える活発な交流と創造が実現した。

●課題
*谷津田をフィールドにした地域福祉の基盤作り。
*活動が根付くには地道な呼びかけと定期的な実施が大切だと考えるので、今後の予定ですが今年は夏と秋に行事を予定。
*今年は夏と秋に行事を予定。



私達は先ほど教育分科会で話をされた宮村さんたちと共に今回のワークショップを行いました。メインテーマを谷津田に置く福祉のあり方と新たな相互理解や交流の試みということでプログラムを行いました。プログラム内容は先ほど宮村さんが言っていたので大体は分っていたかと思いますが、机づくりなどでは子ども達を始めとして一生懸命工作に打ち込む姿が印象的でした。この大藪池周辺は医療福祉施設が多い旧農村地域で現在の景観というのはNPOや地元住民のみなさんの活動で維持されています。当日は小雨が降る中100人前後の多くの人々が集まっていた自ずから自然福祉への関心の高さを確認し、予想を越える活発な交流と??が実現いたしました。今回のワークショップで谷津田をフィールドにした地域福祉の基盤作りがスタートしたと思います。活動の継続には地道な呼びかけと定期的な実施が大切だと考えるので、今後の予定ですが今年は夏と秋に行事を予定しております。以上です。

(横田耕明)

9 里山と政策分科会

里山は創造力をふくらませる「場」

里山に子どもたちの声が響く
和光保育園

お母さんがつくった
プレーパーク どんぐりの森

千葉市「子どもたちの森」



会場写真



9 まとめ:政策は自らつくっていくもの

●現状

- ・都市化で身近な自然・里山が失われて、子どもたちが自然に触れ合う機会が減ってしまった。
- ・社会とかわからない、実体験の乏しい現代の子どもたち

●結論

- ・思いを実現していくためには、自らが声を出し、場をつくり、人を巻き込み、つながっていく。
- ・政策は私たち自らがつくっていくもの

●課題

- ・社会の仕組みに関わっていくことがなくなっている。自分には関係ないと思っている人たちがどう巻き込んでいくか。



「里山と子ども」という観点から政策について参加者で考えました。三つの事例をまずお話いただきました。

1つ目は周りの里山の中で地域の大人たちをまき込んで子どもたちを育てている自称里山保育園の取り組み。

次に子どもたちを自然の中で育てたいという強い思いから、自分たちで里山にプレーパークを作ったお母さんたちの取り組み。

最後に、いわゆる都市公園、都市部にある普通の公園ではない、里山を活用した子どもたちのための公園（森）作りを行っている自治会の新たな取り組み。

この三つの事例をもとに意見交換しました。

豊かな自然の中で子どもたちを育てたいという思いは誰もが望むことですが、現状は自然が失われて、子どもたちが実体験できる場がなくなっています。

このような中で政策というものを考えた時に、私たちに何ができるのか、やはり思いを実現させていくためには動き出す勇氣、自分たち自ら声を出して、場をつくったり、人を巻き込んだり、人とつながり、行政とも連携して、自分たち自身で政策作りに取り組んでいかなくてはならないというまとめになりました。

(小西由希子)

10 里山と観光分科会

里山の四季を活かした観光

●シンポジウム:

日時:5月21日
場所:武蔵野市中央学院大学6号館3F
(834教室)にて
特別ゲストによる講演:
「里山とそのすばらしさ」出演者:中村俊彦
講演:
「里山の四季を語る」出演者:浅井衆男
グループ討議:
「里山イメージ作成」

●シンポジウム(予定)

日時:
6月18日(土)12:00から
会場:「道の駅」ローズマリー公園・丸山町
里山ハイキング
安房谷の里山をハイキングし四季の里山を見学し
ます

6月19日(日) 9:00から
前日ハイキングした安房谷の里山を題材に、里山の
価値について語ります。またその価値をどう観光に結び
付けていくかの可能性について考えます。



会場写真



里やまの春 浅井衆男 画

10 まとめ

●現状

- ・観光に合うよう努力しているもののゴミが多く、癒しにくい場合が多い
- ・里山のイメージは人それぞれあります。

●結論

- ・当事者だけでなく、多くの人手も借りて、幅広い活動をしたい。

●課題

- ・里山を見る側と管理する側の意見を調整しながら今後の里山づくりにあたりたい。

午前中の参加者は20名でした。現状としましては里山と観光について、観光にもあるように、当事者は努力しておりますがゴミは多くてなかなか癒しの場にならないという例もありました。里山に対するイメージが悪いということになります。結論としましては当事者だけで協力してもなかなか思うようにならないと。人出と支援をあおぎながら、幅広い活動したいということでございます。我々としては、里山を見る側と管理する側の意見の違いもありますので、そういうつなぎ役に徹していきたいと思えます。まとめとしまして、観光として里山には目だけで楽しむのではなく、時には目をつぶり五分でも風の音、風のおいを楽しんでみたことがあるとおもいます。また里山のお土産としましては足元に咲いている花の名前の一種類でも、木の名前の一種類でも覚えて帰ってもらえたいと思います。今日の分科会は前夜祭です。本番は6月18日19日と丸山町で行います。皆さんよろしくお願ひします。

(横山 武)

11 里山と水循環分科会

「健全な水循環」～恵み豊かな水子どもたちへ～

●シンポジウム:

日時: 5月21日
 場所: 中央学院大学6号館3F (635教室)にて
 講演 (佐倉 保夫氏 (千葉大学理学部地球科学科))
 事例発表
 (1)「印旛沼のみためし行動」 三品 圭史氏 (千葉県農土整備部)
 (2)「名戸ヶ谷湧水と子どもたち」 藤崎 将氏 (名戸ヶ谷ビオトープを育てる会)
 (3)「手繰川協働事業と野田での市民活動」 小野 由美子氏 (さくろ人と自然をつなぐ仲間)
 意見交換会 コーディネーター 瀧 和夫氏 (千葉工業大学生命環境科学)



会場写真

●野外体験(予定)

「親子で体験！船に乗って手賀沼の水調へ生き物探検」
 日時: 6月12日(日) 10:00～15:00
 集合場所: 手賀沼水の館前 場所: 手賀沼周辺



11 まとめ

- **現状** ・印旛沼流域で県民・行政が水循環の健全化に取り組み始めている
 ・市民はや谷津田などで汚れた水の入り混じった中で活動をしている。
- **結論** ・地域の肩が水循環をよくするということに何を望み、何を残すか、合意を得ること
- **課題** ・地下水をいかに保つか・・・
 雨水の浸透
 灌漑域の保全...など
 ・地表に流れる豊かな水辺作り



初めに千葉大の佐倉先生から里山の水循環というテーマでお話していただきました。

雨が降って地下にしみ込み、湧水として出てくるまでの段階のお話で、地下水の補充源は涵養域に降った雨水で涵養域がとても大切である、また地下水の年令は様々で一千年を越す水も有るということ、などです

事例発表というかたちで、千葉県の方から印旛沼の周域に「みためし行動」で、湧水復活の為の雨水浸透柵の推進、生活廃水の改善、エコ農業の推進などを実施しているという話、柏市にある名戸ヶ谷ビオトープを作る会は「湧水と子供達」というビオトープを通じて子供たちの活動の話。佐倉市にある手繰川を、親水の川づくりとして維持管理しているという話。この手繰川は、市民と佐倉市と千葉県と市民との協働でやっているということでした。

いま県、市、町、村や県民の方が一緒になって流域の水循環を良くしようという動きが始まっていますが

共通の課題は、地下水をいかにキレイに保つかということ、雨水を汚さずにいかに地下へ浸透させていくかということです。その結果、綺麗なせせらぎとして流れる水を望んでいるわけですが、残されたすこしの斜面林を涵養域として利用することを行政をはじめ県民の皆さんが一体となってじっくりと考え取り組んでゆく必要があります。

里山保全というかたちで、いろいろと行動されていますが、子どもたちにも伝えていかなければならないのです、健やかで綺麗な水が流れる川を始めとして、それらを維持するためにバランスの取れた自然環境が残されていくということが大事なのだとすることを子供たちと一緒に体験してゆくことが、結果として里やまの水循環を維持してゆくことになるのではないのでしょうか。(荒尾繁志)

12 里山と野生動物分科会

里山の野生動物との共存を考える

●シンポジウム:

日時: 5月21日
 場所: 我孫子市中央学院大学6号館3F (637教室)にて
 基調講演 羽山 伸一 (日本獣医学産大学獣医学部助教授・野生動物学)
 パネルディスカッション
 ・羽山伸一(同上)
 ・栗原 裕治 (NPO法人千葉まちづくりサポートセンター 副代表)
 ・清水 享 (サージミヤウキ・電気橋研究員)
 ・後藤 肇浩 (帝京科学大理工学部アニマルサイエンス科4年)
 ・千葉県→市町村の担当者(予定)
 ・被害農家の方(予定)



会場写真



12 まとめ 野生動物対策は町ぐるみで

- **現状** ・外来種:面積の割りに多い外来生物
 ・農産物被害:被害額横ばい、無秩序な対策によるサル被害の拡大
- **結論** 地域作りとリンク、民間をも交えた野生動物被害対策
 → 住民への説明、理解
 → やる気の醸成、戦略計画の樹立
- **課題** ・子ども、女性も含めたさまざまな立場からの <地域の将来> イメージの構築
 ・専門技術者の配置、自然環境管理機関の創設



私達は、今日の午前中に里山の野生動物との共存を考える、というテーマで分科会を行いました。最初に基調講演として、羽山伸一先生（日本獣医学産大学獣医学部助教授・野生動物学教室）に50分お話を頂き、その後、パネルディスカッションに移行し、4人の専門家の方々をお招きし活発な議論を行っていただきました。現状としては、千葉県は外来種の問題が浮上しています。アカゲザルやキョン、カミツキガメやアライグマなどの外来動物の生息報告がなされています。また猿、猪、鹿といった大型野生哺乳類による農作物被害が深刻です。ニホンザルの有害駆除数も千葉県は全国で一位という現状にあります。本日の分科会のまとめとしては、「野生動物対策は町ぐるみで」。地域づくりとリンクしながら、住民と情報を共有したりやる気を出させたり、民間を交えた戦略計画をたてていくことの必要性。さらに、女性や子どもも含めた様々な立場や視点からの「地域の将来」といったイメージをきちんと構築し、また専門技術者を配置したり、自然環境管理機関を創設するという課題が挙げられていました。以上です。

(中野真樹子)

13 里山と文化と伝統分科会

遺跡からみた里山景観

●シンポジウム:
日時:5月21日(土) 10:00~12:30
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F(658教室)

- 講演者 加藤賢三(分科会代表)
●講演「遺跡からみた里山景観」
1. 縄文時代 上野秀明
(財)千葉県文化センター(上野研究員)
2. 弥生~中世 菅生 衛
(千葉県教育庁教育振興部文化財課
文化財保護室 主任文化財主事)
●意見交換 コーディネーター
西野 元(国土院大学 文学部非常勤講師)



会場写真

●野外体験(予定)

場所:手賀沼および近郊
日時:6月12日(日) 10:00~15:00(小雨決行)
備考:我孫子市との共催、水循環分科会との協働



13. まとめ 遺跡に学ぶこれからの里山のあり方

- 現状 私たちの暮らしは利便性を追求した結果大きく変わってきた
- 結論 縄文時代から資源循環型社会が作られている。これをもう一度学ぶ。
- 課題 利便性のカベをどう乗り越えられるか



分科会の内容ですが、一つは縄文時代に、私達がどのような生活をしていたのかという話しです。まず生活する中で集落ができます。するとゴミが捨てられていくわけですが、それは文化遺産としては貝塚として理解しているわけですが、縄文時代からゴミ問題があって、それをリサイクルという形で上手に利用されてきています。それでその生活を見ると、それは、資源循環型社会の実現に向けての良いお手本でした。さらに縄文時代以降、私達の生活習慣の変遷については、このような形で遺跡に学び、これからの私達の生活も送ればと考えているところです。現在の状態は自分達が利便性を追求することによって環境が変わってきたので、今日勉強したように、縄文時代から循環型社会が作られていることをもう一度学ぶ必要があります。

その時に私達が一度獲得した利便性をどの程度まで理性的に抑えて、持続可能な社会の実現に向けて行動していくかが課題になるのではと思います。

(加藤賢三)

14 里山と子どもの健康分科会

化学物質から子どもを守ろう

●シンポジウム
日時:5月21日
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F(658教室)

講演 藤原寿和氏
(有害化学物質から子どもの健康を守る千葉県ネットワーク代表)

講演 朝倉法子氏「佐倉からの報告」



会場写真

●シンポジウム

残土処分と森林保全

場所:市原サンプラー
日時:6月26日(日) 9:50~12:00 見学
13:00~17:00 フォーラム 後援と討議会



14 まとめ 化学物質から子どもを守るために、私どもは地道な活動を皆でしていきましょう

- 現状 子どもたちの間に化学物質による健康被害が確実に増加しており、国も県も化学物質への取り組みが滞っている現状がある。
市民は生活の利便性のみを走り、それらのリスクが子供の将来に影響を及ぼすことを追求しようとしていない現状である。
- 結論 子どもたちの教育や過程の中で化学物質に関して不足している、色々な機会を通じて実際に対処する方法を知らせていくことが必要とおもわれます
- 課題 世のお父さん、お母さんたちに、このあふれ出す有害化学物質を、間違いない情報として流すことが出来るかを、生活のなかの身近な化学物質と、その影響リスクを調査し、多くの市民に知らせるとともにメーカーや行政に対策を提案していくことを考える



「有害物質から子どもを守る千葉県ネットワーク」は「残土・産廃問題ネットワーク・ちば」と連携しているグループです。よろしくお願いします。

昨年、全国の不法投棄の3分の1は千葉県にはいると、環境省発表で報道されました。その不法投棄の又3分の1が銚子に入っている。井戸水の電導計検査結果が1200を越えているところもあります。保健所の検査で800をこえているところもあります。他のところでは死んでしまうといわれている数値です。ペットボトルで料理をするという家もありますが、大変なことです。子どもだってたくさんいます。

そこにまた管理型処分場を作る許可が下りている。昔は利根川のほとりの水田が続く里山が、今は千葉県の北のはずれだからとゴミの不法投棄だらけなのです。どうして一極集中ゴミ捨て場にするのでしょうか。それらの産廃・残土は他県から持ち込まれたものがほとんどなのです。誰にも生活権があります。子どもにはたくさん未来を生きる権利があります。子どもは大人よりもっと敏感に有害物質を体にとり込みます。国も県も子供への対策が非常に遅れています。生活の利便さを追求するその裏にアレルギー体質、化学物質過敏症、ぜんそくなどが年々就学児童の調査にも増えております。日本の未来を担う子どもにもっと光を当ててもらいたい。

(井村弘子)